*この記事・写真等は日経新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複写・転載することを禁じます。

経済教室

子供のしつけ―経済学で考える

「将来消費」の割引と相関

ポイント
- 親子関係は貯蓄行動を通じて経済に影響
- 忍耐強い親、子供の将来考え厳しくしつけ
- キリスト教徒が多い米国、日本より厳しい

大垣 昌夫 慶応義塾大学教授

筆者は昨年、25年間の米国生活に終止符を打って帰国した。長期にわたって日米両国に住んで、自分なりに日本の長所と短所を客観的に見ることができたと思う。

その中で、特に学齢期前の子供のしつけについて、日本では米国に比べて、甘い場合が多いと感じることがたびたびあった。例えば店の中などで子供が走りまわって、ほかの人々に迷惑をかけていても、親が注意しようとしないか、注意しても「走りまわるとけがをするよ」とか「おじさんにしかられるよ」などと言う。それに対して米国では、人の目を気にせずにその場で「それは悪いことだ」と、きっぱりしかる親がほとんどだった。

日本では、優しくなんでも許容することが愛だと思いこんでいる面があるのかもしれない。何が良いことで、何が悪いことか、倫理判断の確信を持って子供をしかる親が少ないのかもしれない。

◆◆◆　◆◆◆

しつけの問題は、親子関係のひとつの側面である。親子関係は、遺産動機などを通して貯蓄行動と関連している。親子関係をどのように経済モデル化するかによって、国全体の貯蓄や成長などに関するモデルの政策的な含意も変わってくる。このように親子関係は経済学の核のひとつであり、日米に大きな差があるかどうか、ある場合はその原因は何かを調べることが、経済学のひとつの課題になる。

そこで筆者は2007年ごろから共同研究者たちと一緒に、親によるしつけ行動を描写する「タフ・ラブ・モデル」と呼ぶ理論モデルの開発と実証研究を続けてきた。実証研究では大竹文雄大阪大学教授、亀坂安紀子青山学院大学教授、猪田康平日本大学人口問題研究所ポスト・ドクトラル・フェロー、チャールズ・ユウジ・ホリオカ大阪大学教授とともに、大阪大学による日米のアンケート調査の分析を行っている。研究はまだ途上だが、見えてきたことがある。

臨床心理士の信田さよ子氏の近刊『タフラブという供刀』によると、タフ・ラブという言葉は米国のアルコール依存者の妻たちの自助グループ「アラノン」が苦しい経験から生み出した知恵として1950年代に使われるようになったそうだ。夫に説教し、なんとか酒をやめさせようとあらゆる策をろうしても、妻たちは夫に酒をやめさせることができなかった。このような経験から自分の力の限界を認め、勇気を出して厳しく突き放し、ただ見守るタフ・ラブという愛の概念が生まれた。

これは、相手に密着して尽くす家族愛という常識的な概念とは違っている。アルコール依存などの事例は、極端であり、自分には関係ないと感じる人も多いであろう。しかし、かえって極端な例から、間違った常識にとらわれず普遍的な真実が見えてくることがある。本当の愛とは何だろうか。一般的な家庭の家族関係、特に子供のしつけについて考えるときも、タフ・ラブという概念が手がかりとなるはずである。

甘い親は「今」を重視

宗教・世界観で日米格差も

我々の研究では、しつけの際、親が子供の将来の幸福を願って、子供にとって現在は苦しいことも容認するということをタフ・ラブと考えている。タフ・ラブを持つ親は子供を甘やかさないで、手を放して厳しく見守る。タフ・ラブにはいろいろな要素があるが、われわれは伝統的経済学や行動経済学、心理学の研究をもとに「時間選好」にかかわる要素に注目している。

◆◆◆　◆◆◆

時間選好とは、人が「現在と将来」のような異時点間の消費や余暇について、どのような好みを持っているかということである。ほとんどの人々には、現在の消費を将来の消費よりも重視して、将来の消費から得られる効用を割り引いて評価する傾向がある。このことを「時間割引」といい、割引の割合を「時間割引率」という。

時間割引率の低い人は、忍耐強く、満足を後回しにすることを比較的苦にしない。時間選好のもうひとつの重要な要素は、苦しいことは先送りして、今、楽しみたいという誘惑に対して自制することができるかどうか、ということである。

時間割引率が低く、自制できる人は経済、学業、対人関係などの面で成功する傾向がある。60年代に米スタンフォード大学の心理学者が行った有名なマシュマロ・テストがある。この実験では4歳児に1つのマシュマロを与え、実験者が部屋を出て戻ってくるまで食べずに待てたらもう1つのマシュマロをあげると約束した。その実験に参加した子供たちを、その後高校卒業まで追跡調査したところ、食べずに我慢できた子供たちは、そうでない子供たちに比べ、対人能力に優れ、成績も優秀である傾向があった。また依田高典京都大学教授らの最近の実証研究の結果は、時間割引と自制の要素が、喫煙などの健康とかかわる行動に深くかかわっていることを示している。

タフ・ラブ・モデルでは、時間割引率の低い親は、子供が忍耐強くなることを願って、子供時代の消費を低く抑える。また、子供が悪友たちの影響を受けて忍耐強くなくなってしまうと、子供がもっと忍耐強くなることを願って、お小遣いを減らすなどのしつけの行動をとる。

我々の実証研究では、日米のアンケート調査で、例えば「子供が高熱を出して苦しんでいるが、その熱にはまったく害が無く、薬を飲ませると大人になったときの抵抗力が少し落ちるとしたらどうするか」などの仮想質問をした。それによって回答者が学齢期前の子供に対し、タフ・ラブに基づいたと考えられる態度を持つか、子供の幸せを考えず自分さえよければいいという利己的な態度を持つか、3種類に分類することを試みた。

その結果、米国に比べて日本では甘やかす親が多く、タフ・ラブの親と利己的な親は少ない（グラフ参照）。同じ分類に基づいた統計分析によって、時間割引率の低い親（忍耐強い親）は、タフ・ラブの態度を取る傾向があることも分かった。この実証結果はタフ・ラブ・モデルと整合的である。

ただ、時間割引率についての比較では、日米の間で大きな違いはなく、時間割引率の違いによって日米のタフ・ラブ行動の違いを説明することはできない。そこで考えられるのは、親の宗教や世界観がタフ・ラブ行動に影響を与えているのではないか、ということである。

米国ではキリスト教徒が多いのに対し、日本では仏教徒と無宗教の人々が多い。キリスト教では、事故や病気のようなことも神が許容しないと起きない、という考え方がある。そこから、苦しみには、人間にはよく理解できなくとも人格の成長につながるなどの意味があるはずだ、という世界観を持つキリスト教徒が多い。

親は、長期的な子供の利益のために厳しくしつけるのが良いと分かっていても、今の子供の苦しみは避けたいという誘惑を受けることが多い。「苦しみには『試練』としての意味がある」という世界観を持つ人は、そうでない人に比べ、将来の成長という子供の利益のために、現在の子供の苦しみを許容することが容易であると思われる。親の宗教や世界観のタフ・ラブ行動への影響についての実証研究はまだ予備的な段階であるが、実際に影響を与えているらしいことが分かっている。

◆◆◆　◆◆◆

しつけのためには、親が倫理判断について確信を持つ必要があるが、倫理観とは世界観の一部である。最近、話題になった映画「アバター」では2つのグループの世界観が異なり、より大きい武力を持った側が自分たちの世界観を絶対視しているために、戦争が起こった。善悪の判断が世界観に依存し、世界にはさまざまに異なった世界観を持つ人々がいるなら、自分の倫理判断を絶対視することには危険がある。

親は幼い子供よりも大きな力を持っているだけに、親が自分の倫理観を絶対視して子供に押しつけてしまうことや、しつけのつもりが虐待になってしまうこともありうる。しかし、一人ひとりの親が「本当の愛とは何か」と問いかけて求めていくなら、善悪について少なくとも方向性が見えてきて、確信を持って子供をしつけることができるようになっていくと筆者は考える。

おおがき・まさお　58年生まれ。シカゴ大博士。オハイオ州立大教授などを経て09年から現職。専門はマクロ経済学、計量経済学、国際金融

日本経済新聞　2010年5月4日掲載